



Gallery Talk

誌上 ギャラリートーク

01

会期 2008年 10月24日(金) ▶ 12月7日(日)

没後80年記念

佐伯祐三展 パリで夭逝した天才画家の道

佐伯祐三ほど、日本の洋画家で熱烈なファンのいる画家はいないのではないのでしょうか。

佐伯は、1898年大阪府に生まれました。中学時代、赤松麟作に洋画の手ほどきを受け、東京美術学校を卒業した彼は、1924年26歳の時、妻子を連れフランスに渡りパリでセザンヌ風の絵を描いていました。しかし、フォーヴィスムの巨匠ヴラマンクを訪ねて自作を見せたところ、「アカデミック(学校主義)！」と一喝され強い衝撃を受け、画風を変貌させます。

その後、一時帰国し、遥かパリを離れて日本の風景と向き合った事で改めてパリへの思いを強くした佐伯は、再び妻子と渡仏します。最後のパリでは、すばやい筆致で広告文字やカフェの様子を描き、傑作を次々と生み出していきますが、自らを駆り立てるような仕事ぶりがたたたり、1928年の8月病魔により佐伯の生命は絶たれてしまいます。30年という短い生涯でした。

運命の1928年。この年の3月寒さの中、雨にもかかわらず重い絵の道具を持って街角を歩き回り、風邪をひいて病床に臥しがちの身となった頃に描かれた作品がこの《郵便配達夫》です。この作品では、モディリアーニ作品のようなデフォルメと、天性の画家としての優れた「眼」による人間観察がみられます。

本展覧会では、夭逝の天才画家佐伯祐三の画業を代表作を含む約120点の作品で回顧します。あわせて、佐伯芸術の成立に深い関係を有した先輩・友人画家の作品やパリ客死で断たれた佐伯の志を継承した後輩画家たちの作品も展示し、佐伯芸術の広がりを楽しんで頂ける展覧会となっています。

[佐々木真理子]



《郵便配達夫》1928年 大阪市立近代美術館建設準備室蔵

02

流 政之展

JR高松駅にある赤とグレーの作品《だいてんまい》や、高松市美術館エントランスに高く上に伸びる黒い作品《ながれバチ》、また瀬戸大橋記念公園にある4000トンの石を円状に積んだ作品《鬼屏風》など、流政之の作品は香川県では目にする機会も多いと思います。県外でも様々な場所で流作品と出会うことができますが、洗練されたフォルムと素材を生かしたその独自の作風から、遠くからでも一目で流作品とわかります。

流政之は1923年長崎生まれ。少年の頃に父から古流武道教育を受けた後、刀鍛冶、ゼロ戦のパイロットを経て、終戦後、敗戦の惨状を自らの足で訪ね歩きます。55年には日米戦没パイロット追悼のための木と鉄による作品で初個展を開催、その後、本格的に彫刻の制作を開始。石の彫刻をはじめたきっかけは、北陸で子を亡くした母親が石地蔵を建てる姿を見て感銘を受けてから。66年から庵治の東海岸にレンガ造りの建物、ナガレスタジオを構え、制作を続けています。

本展では、ミカゲ石やブロンズ、コールドレン鋼などによる流の初期の作品、《ながれバチ》と《サキモリ》を中心とした代表作、近作を中心とした現在の流作品、関連資料の展示などを見ることができます。「石」だけど石ではないような素材感と存在感に圧倒されそう！ぜひ展示室で流作品の魅力をお楽しみください。

[末原香里]

会期 2009年 1月4日(日) ▶ 2月8日(日)



《サキモリ》2000年 ©Nagare Studio

civi

の主な活動

2008.4月



9月

2008

4/4～5/18 **A** 「印象派の巨匠ピサロ―家族と仲間たち―展」ギャラリートーク（開催回数のべ22回、参加者数のべ385名）※4/12 **B** 子どものアトリエ vol.19「お花見アート」（講師：美術家・山端篤史氏）アシスタント

5/10 香川県立ミュージアム見学（案内：同館ボランティア with、同館学芸員・松岡明子氏）

7/19.22.24.27.28 「開館20周年記念コレクション+（プラス）ひびきあう音・色・形」鑑賞サポーター研修

7/25～9/7 **C** 「開館20周年記念コレクション+（プラス）ひびきあう音・色・形」鑑賞サポーター活動参加（会期中毎日13～16時）7/25.26 **D** ワークショップ「音のかけらをつくろう、あそぼう」（講師：美術家・金沢健一氏）アシスタント

8/2 トークショー「私の作品について」、ワークショップ「聴くことのレッスン」（講師：美術家・藤本由紀夫氏）参加

8/16 ワークショップ「家に潜む家電の音をさぐる」（講師：美術家・和泉希洋志氏）参加

8/23 **E** ワークショップ「イチハラヒロコワークショップわくわくドキドキ世界一決定戦」（講師：美術家・イチハラヒロコ氏）アシスタント9/5 **F** 高松北中学校「北稜祭」にて美術部員による鑑賞サポーター活動参加報告を見学9/27 **G** 「コロエ展」（神戸市立博物館）研修旅行、藤本由紀夫氏アトリエ訪問

※ギャラリートークは会期中の日曜・祝日、各午前・午後開催



▲ピサロ展ギャラリートーク風景。



▲お花見アート。



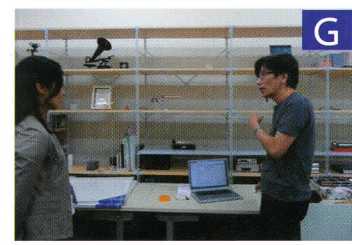
▲《振動態》の実演をする中学生サポーター。



▲自分たちで制作した音のかけらで遊ぶ参加者。



▲イチハラヒロコ氏。「今井美樹にそっくりだった」（本人談）頃の自分とともに。



▲きれいに整理整頓された藤本さんのアトリエ。

A 「印象派の巨匠ピサロ 家族とその仲間たち展」ギャラリートーク

点描技法による田園風景のポスターに惹かれたお客様が多かったようで「窓からの眺め、エラニーシユルIIエプト」が見たくて来た」という声をたくさんお聞きしました。その皆さんが最初に目にするのが、ピサロの原点ともいえるバルビゾン派の作品たちで、ここから始まるピサロの画風の変化の旅を、作品の背景や印象派の作家たちとのエピソードを交えてご案内しました。中でも女性に好評だったのが《淡紅色のしやくやく》で、妻へのプレゼントというキーワードが人気の秘密だったようです。展覧会の最後は、家族の作品群でしめくられ、彼をとりまく人々の作品を交えた、ピサロの全貌を知ることができるスケールの大きい展覧会でした。

「高木由貴子」

C 「開館20周年記念コレクション+（プラス）ひびきあう音・色・形」鑑賞サポーター活動参加

鑑賞サポーターとして参加したコレクション展。いつもよりさらにぐっと鑑賞者との距離が縮まります。夏休みが終わると子ども達の姿は減り、ゆったりと自分のペースで鑑賞する大人の

B 「子どものアトリエ vol.19」アシスタント

ベリベリ先生こと山端（やまべり）先生による「お花見アート！」はいつもと場所を変えて、塩江美術館・陶芸館です。季節は春、行ってみると美術館の周りは桜が満開！お花見しながらアートするってことなんだ！扉も開け放して、外と出入り自由な会場でユニークな制作が始まりました。まずは配られたボードに塩江の春をスケッチ。色は絵の具ではなく、なんと折り込みチラシ！チラシを細かくちぎって貼りつけていきます。ピサロも点描法で描いていた時はこんな感じだったのかしらん。一方子ども達は、制作していても外が気になるらしく、何度か呼びにいました。もちろん作品は完成させましたが、のんびり楽しいお花見アートでした。

「三好ひさ子」

D 「金沢健一ワークショップ音のかけらをつくろう、あそぼう」アシスタント

「音のかけら」―このロマンチックなことばの響きに期待が膨らみました。それは、直径30センチ程の黒く丸い鉄板を、好きな形6ピースに溶断木琴のバチで叩いてその音を確かめる、2日間のワークショップでした。鉄板を溶断する作業では、危険なので金沢さんがバーナーで焼き切ってくれましたが、最後のひとかけらだけ、参加者が金沢さんの介添えで焼き切りました。炎と鉄板の熱さは一生の思い出になったでしょう。しかし、ワークショップはここからが本番。参加者みんなが輪になって、順番に自分だけの

方達が増えました。金沢健一の《振動態》の実演には御年配の方も好奇心をそそられます。「これ何かしら」「私にも出来るかしら」と、最初こわごわ触れていた方もプンプンという独特の響きに包まれて白い粉が踊り出すともう夢中。模様が現れると目を輝かせて「あー楽しかった」と満足顔。時々手を添えてお手伝いすることで鑑賞者の驚きや喜びがじかに伝わってきました。作品を通して心も一緒に響き合うことが出来た貴重なサポーターの体験でした。

「富岡洋子」

E 「イチハラヒロコワークショップドキドキ世界一決定戦」アシスタント

「音のかけら」の音をバチで叩いて出ていきます。ドレミの音階はないけれど、各自が工夫して、叩き方によって千変万化する音色の豊かさを楽しみました。そして同時に、互いに響きあう音を、心のつながりとして体験できました。

「堀本真弓」

イチハラさんは、心に浮かんだコトバを、白いパネルに黒い文字で表記し、作品として発表を続けているアーティスト。その強烈なキャラクターに驚き、圧倒されたワークショップでした。参加者は3つのグループに分かれて、各自で新しい擬態語・擬音語を考えます。グループ内でひとつのコトバを選び、グループ毎に発表、そしてベストワン（これが世界一）を決定します。私のときは3グループで、「うどんうどん」（驚いたときの様子？）が世界一になりました。イチハラさんは常に手帳とエンピツを持っていて、パツと思いつくんだコトバを書き留めているそうです。「アトリエがいらない」とイチハラさんの笑顔が印象的でした。

「堀本真弓」

Tetsuya Noda



野田哲也
《日記 1979年2月26日(a)》《日記 1979年2月26日(b)》
1979年 木版・シルクスクリーン・紙 97×63cm 高松市美術館蔵

畳半分ほどの版画が2枚。
(a)は、少女の頬がリスのようにふくらんでいる。その理由は少女の掌のリングで判明する。

(b)では同じ少女が、お気に入りの布団を、抱きしめるようにまとう。誰でも思い当たる日常に鑑賞者は共感する。

この、あまりにも私的で平凡な題材の版画作品を、世に発表し驚かせたのが野田哲也だ。1940年、熊本県宇土郡不知火町に生まれた彼は、写真と版画の二つの表現方法を融合させた先駆的作品を制作。

1968年東京国際版画ビエン

ナーレ展で大賞を受賞後も、数々の国際的賞を受け、海外でも評価されている版画家である。モデルとなった少女は野田の実娘で当時5歳。他にも家族やその周辺に彼は題材を求めている。日常的な写真での記録を「写真は自分のデッサンだ」と野田は言う。

ここでもう一度本作に戻ろう。和紙の質感と渋い色あいがなつかしさと呼び起こしている。作者はすべての作品を《日記》とし、日付をタイトルとしているが、時間や個人の匂いを感じないのは何故だろう。選ばれた写真の原板に、時には鉛筆や筆で陰影をつける修正を作者は施す。謄写ファックスで作品は変化し、作者の思う「表現」を展開する。手を加えるいくつかの過程が、この作品に普遍性を与えているのだろうか。私の考えが及ぶのはそこまでだ。まだ謎はとけない。

さて、《日記》だが、40年の歳月を経た現在も、途絶えることなく制作は続いている。 [高木由貴子]

(参考文献)『高松市美術館収蔵品図録Ⅱ』『野田哲也全作品 1964-1978』『野田哲也全作品Ⅱ 1992-2000』

F 高松北中学校「北稜祭」にて美術部員による鑑賞サポーター活動参加報告を見学

コレクション展の鑑賞サポーターとして大活躍の中学生たちが北中美術部員ということ、その文化祭で鑑賞サポーターの体験を発表しているということで、牧野学芸員とciviで文化祭を訪問しました。美術部顧問の藤原先生と部員の高野君と戸倉君のお出迎えを受けて、まずはなんと校長室に通していただきました!丸谷校長先生は、今回の展覧会のとっぴ金沢健一《振動態》に興味がありで、展示室に3回も足を運んで下さったとのことでした。その後、美術部の展示室に案内されて、みんなの作品と鑑賞サポーターの体験報告の展示を見ました。解

G 藤本由紀夫氏アトリエを訪れて

秋晴れの下、civi 12名で早朝一路神戸へ。まずはコロー展を鑑賞しました。憧れの「真珠の女」と対面し、コロー特有の色といわれた「銀灰色」も目の当たりにすることができました。やはり実物はスラシカッタ!!!満足のランチの後、いよいよ午後は藤本由紀夫さんのアトリエ訪問です。藤本さんは柔和な笑みをたたえて私たちcivi 5名を迎えてくれました。アトリエというよりギャラリーのよう。

説は、中西君と堀君が丁寧にしてくれました。彼らには、将来もアートを身近に感じてほしいものです。楽しく懐かしい気分になることができました。 [堀本真弓]

広い床、窓際にテーブルがひとつ。壁や棚に整然と並んだ藤本作品。ジャズピアノのBGMに、藤本さんがいれてくれたお茶とお菓子で歓談。穏やかな口調で淡々と、しかし熱く語ってくれました。印象に残ったのは、「絵は読み解くもの」といわれたことです。漠然とただ「色がきれい。」の感覚で見ると、作家自身のことや作品の背景などの知識があつて見るとでは全く違ってくる。「この絵はすごい」と言えるアナタがすごい」ということだとciviとしての教訓のように聞きました。大人の隠れた遊びゴコロと哲学的藤本作品がわかってくるので、他の美術作品ももっと楽しくなるのだでしょう。藤本さんの端正なアーティストとしての姿を間近に見ることができました。「芸術の秋」にふさわしい、感激の一日となりました。 [堀本真弓]

親指の記憶―鑑賞サポーターの活動について

特別展「開館20周年記念コレクション(プラス) ひびきあう音・色形(2008.7.25〜9.7)」では、当館の現代美術コレクションと「音」の作品を組み合わせて展示したが、「音」の作品の中には、観客自らが触れて音を出すなどする「観客参加型」作品が比較的多く含まれるため、その鑑賞の手伝いをするボランティアメンバー「鑑賞サポーター」を募集した。対象年齢は中学生以上。公募で集まったのは中学生15人、高校生1人、大人7人。そしてそれにシヴィの有志などを合わせた37人が「鑑賞サポーター」として活動することになった。

7月19日 第1回研修。初顔合わせの日。自己紹介、班分け、活動日決めを行なう。

7月22日 第2回研修。この日は当館所蔵作品の展示のためにお越しいただいた奈良美智氏にお願いし、鑑賞サポーターのためのレクチャーをしていただくことができた。この警沢なイベントの詳細は、裏表紙の記事にて。

7月24日 第3回研修。この日は展示最終日。展示を終えた金沢健一氏にお疲れのところお願いし、展示作品《音のかけら》と《振動態》についてのレクチャーとデモンストレーションをしていただいた。砂をまいた鉄板を振動させ幾何学図形をつくる《振動態》は、図形の作成には一定のトレーニングが必要であり、作者から直接指導してもらえるこの機会は大変貴重。魔術師のように図形を次々と作る金沢さんの一挙一動をつぶさに観察、技の習得に励んだ。

7月25日 展覧会初日。この日の午後から鑑賞サポーターの活動も開始。活動は会期中毎日、午後1時から4時まで、藤本由紀夫氏と金沢健一氏のコーナーに2名ずつが常駐し、お客さんに作品鑑賞の仕方を説明したり、《振動態》の実演などを行なう。3時間、初対面のお客さんに話しかけ、説明をするというのはかなり大変な作業。特に中学生は責任を持って、社会に関わりあう初めての体験であるうから、暗中模索であつたろう。しかし、心配は無用。サポーターの活動はお客さんにかなり好評。アンケートには、「積極的に話しかけ、説明してくれたのがうれしかった」という意見がかなり多く見受けられた。

サポーターの活動で特筆すべきは、《振動態》における中学生たちの活躍ぶり。《振動態》は人によって相性があるようで、最初からすぐ図形が現れる人がいるかと思えば、練習を積んでもなかなかできない人もいるが、不思議なことに中学生は男女を問わず総じて「できる」率が高いのである。中には次々と新たな図形作りに成功する「振動態職人」も現れ、「今日はこんなのができたよ」と楽しそうに報告してくれ、嬉しかった。《振動態》の優れた担い手である中学生抜きには鑑賞サポーターの活動は成立しなかった、といっても過言ではない。

さいごに。鑑賞サポーターのみなさんは、《振動態》のところで、スパーボールのバチを鉄板にこすり付ける作業を日に数十回から百回程度行なうため、力が一点に集中する利き腕の親指を痛めたいた。中には皮が剥け、血まで出た人も。私も軽傷だが、痛めた一人である。今後何らかの原因で親指の痛みを覚えたとき、きっと彼らはひと夏の出来事を思い出してくれるのではないかと、最近ふと思ったりもする。みんなが共有する親指の傷の記憶。それを「きずな」というのであろう。

「高松市美術館学芸員 牧野裕二」



▲エントランスに展示された金沢作品。机が「芸術」であると感じた瞬間。



▲金沢健一氏の《振動態》実演。砂で次々と図形を作る神業に圧倒される。



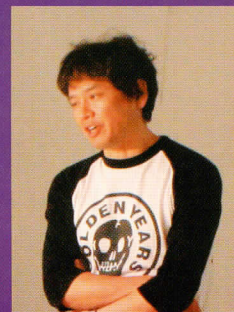
▲筒に耳を当てると不思議な音が聞こえる藤本由紀夫《EARS WITH CHAIRS》。



▲藤本由紀夫のコーナーで最も難解な作品を熱心に解説するサポーター。

LET IT ROCK! ロックだぜ!

2008年7月22日14時、展示作業途中の奈良美智の展示室。ここで『「時間にわたり奈良美智氏によるスライドレクチャー」が行なわれた。話を聞くことができたのは、展示会のボランティアスタッフである「鑑賞サポーター」20数名のみ。当館での展示に青森から駆けつけた多忙な奈良さんに「彼らの質問に答えてくださいませんか」とお願いしたところ、快く承諾してくださったのである。サポーターの大半は中学生。奈良さんは、彼らから寄せられたときに鋭く、ときに拍子抜けするような素朴な質問に、熱心に答え、合間で自身の制作方法や、これまでの展示会や旅の思い出などを、ノートパソコンにためられた膨大な写真をスライドで映し出して話してくださった。Tシャツにジーパン姿の奈良さんはときに寝そべりながら、作品同様、自由で気取らない雰囲気でお話をしてくださったが、その内容は奈良芸術を理解する上で大変参考になるものばかりであり、ラフな語り口の中に洞察力のある鋭い言葉が見え隠れした。以下は奈良さんのレクチャーの一部を書き起こしたものである。[LET IT ROCK!] 当日奈良さんが着るTシャツにはこのような文字がプリントされていた。ロック音楽のように自由と生きる喜びを謳歌する奈良さんの等身大の姿を感じていただければと思う。すてきな展示とお話をしてくださった奈良美智氏、奈良氏にお越しいただくにあたり尽力して下さった小山登美夫ギャラリーの小山登美夫氏、金近幸作氏ほかスタッフの皆様に感謝いたします。



Yoshitomo Nara

僕はキャンバスに絵具で描く絵も描いているけど、いまこの展示室の机の上に並んでいるのは、ノートの落書きみたいに、紙の上に軽い気持ちで自分の気持ちを描いたもの。正直に描いているから今見ると恥ずかしい。手紙とか詩とか夜書いて翌朝読むと恥ずかしいでしょ。昨日展示していたら恥ずかしかった。(中略) どうやって絵ができるか見たことないでしょ。簡単にできていると思ってるでしょ。ちょっと見せようかなと思ってるんだけど、いい?(皆うなずく。奈良氏、プロジェクターに制作過程の写真を映す)これが描き出して、これがこんな絵になる。(まったく異なる二つの絵が映し出される)これはまだ何を描くか決めてなくて、こんな感じの顔にしようかなと、顔だけ描いて、あとはいろんな色の丸を描いて遊んでいる。意味はないけど遊んでいる。その時最後の色は絶対使わないようにしている。そして、水の中に入っている人を描こうと思った。バックを暗くしようと決めて、次に髪の毛の色を決めて、服の色を決めた。(画面を埋め尽くしていたドロップのような色の丸はほとんどなくなると)髪の毛とスカートの形が外にふわふわと広がる感じが気に入らなかったの、こんな風にそれぞれの形を内側に向けた。そうすると人物の形に一体感が出て、一人の人が水の中にポチャッと入っている感じがもっと強く出るようになった。あと口を赤くしたり、目を青くしたりして完成。最初と最後ではぜんぜん違った感じになっているでしょ。でも目の位置だけはほとんど変わっていない。(他にもいくつかの作品の制作過程を紹介)

質問を見せてもらって答えようか。(質問が箇条書きされた紙を眺めて)すごいですね、「年取いくらですか?」(笑)最初から答えていくよ。

—「いままで何カ国くらい訪れたことがありますか?」
数えてみるね。アメリカ、イギリス…(中略)…タイ、パキスタン、アフガニスタン。(全23カ国)でも高松は初めて(笑)じゃ次。

—「年取いくらですか?」

これは誰の質問?(男子中学生が手を上げる)じゃあ正直に答えると…すごいありすぎてわからない。(会場笑)お

金にはあまり興味はなくて、無いよりはあるほうがいいっていうのはわかっている。20年前とかは、みんなのお小遣い位しかなかった時もある。日本で大学に行った時、学費を盗うことに使ってしまった。ヨーロッパ人旅に使った(笑)。28歳の時ドイツに勉強に行こうと思った。学費がただだから。30半ばくらいまでは年収10万くらいかな?いまはたくさんあるけど、年齢の平均で割ったらそんなにない。生活が変わらないからお金は使わない。絵を描いて、ひとに見てもらうのが目標。それができる環境があればよかった。その環境はなぜか最低ラインでも保つことができた。でも無いよりはあったほうがいいから今は幸せか?と言うと、やっぱりそうでもない。あればあったで、またなんかあるんだよ。(会場笑)

—「いつから絵を描き始めたのですか?」

絵って、今みたいな絵ってこと?(質問者うなずく)中学校卒業文集を見ると今と同じ絵。でも大学入ったときは違う絵、世間で50年位前の人が描いていたような真面目な絵だった。ドイツに行く時、自分の絵って何なんだ?と考えた。上手いとか下手とかじゃなくて、誰が見てもあいつの絵だってわかる絵って何だろうと考えた時に、子どもの時に描いていた絵を思い出して、それを今の自分の力でコントロールしたらどんな絵になるかって考えた。

—「なぜ子どもを描くことを思いついたのですか?」

わからない。自然にそうなった。(中略)記憶をたどると、子どものときを思い出すことのほうが多い。だから自分って何なんだろうと考えると子どもが出てきたんじゃないかなって思う。(中略)なぜ子どもの絵が多いのかはわからないけど、たぶん自分が経験してきたものを描いているから。自分が経験して知っているもの。1ヶ月前の自分はわからないけど、10年前20年前は何となくわかる。小学校のときの自分が考えていたことはばっちりわかる。絶対わかるものだけ描いていたならそれが子どもだった。

—「自分以外で好きな芸術家は?」

自分が好きなのが前提になっているのか(笑)。絵を描く自分はそんなに好きじゃない。絵を描いている自分とか絵のことを考えている自分って自分の中の20パーセ

ントくらいでしかないなって最近わかった。もっと大切な自分があると80パーセントいて、それが何かはわからないけどそれがあるってことが最近わかった。(中略)その人が好きとかより、その人のなんかが好き、みたいな。君の優しさが好き、とか(笑)。好きな作家がいても、あの絵はいけどこの絵は全然駄目だなとか、そういうのよくある。基本的に何かしている人はみんな好き。

—「なぜ画家になったのですか?」

それはわからない。絵を描くのが好きでずっと描いていた、周りの人が画家だと決めた。

—「いままで一番成功した作品は何ですか?」

誰の質問?「成功」ってどういう意味?「気に入っている作品ってこと。」(女子中学生答える)これだと思っても、昔描いた違う絵が出てくるとそっちが先になったりすることがあるから結局全部好きだと思う。俺結構冷たい人間で、失敗したら破いたりとか平気でしゃうの。だから残っているのは全部好きな絵。人がいいと言ったらそれが好きになることもある。

—「人物の独特の目つきは意図的に描いているのですか?」

自分の気持ちがよくわからなくて絵にするから言葉では言えない。言葉で言えたら楽だと思うけど、それができないから叫んだりする。私はこんなに悲しいで〜す、ってどんなに言っても説明できないから、わーって泣くじゃない。怒るときも説明できないから叩いたり壊したりする。だから体の動きで説明できない。手の動きではなくて、体の動きの延長で絵を描いているから、物を壊すよりはいい行為だと思うし、感情が直接的に、本当のことが出てきやすいから、自分はそれがあるおかげで助かっていると思う。

—「学生のときの美術の成績は良かったですか?」

悪くはなかったけど俺よりうまい奴が必ず一人いた。学生の展示会に行ったらもっとうまい人、美術の大学に行ったらもっともっとうまい人がいた。高校の同級生は、僕が美術をやっていると聞くと、え、なんで?そんな才能あったっけって言う。あったんだよ!(会場笑)

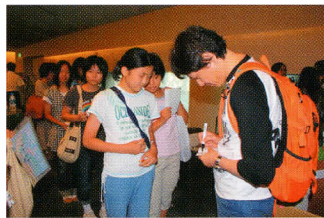
[編・高松市美術館学芸員 牧野裕二]



展示作業中の奈良さん。



レクチャー風景。奈良作品に囲まれて奈良さん本人の話を聞くというなんと贅沢な時間。



生徒手帳や携帯などにサインしてもらうサポーターたち。



展示室の奈良さん。展示、レクチャーいろいろお世話になりました。

ご案内

私たちと鑑賞をご一緒にしませんか?

美術館ボランティア「civi (シヴィ)」によるギャラリートークは特別展示会期中の毎日曜日および祝日の午前11時〜午後2時〜の1日2回、2階展示室にて行います。

発行:高松市美術館 編集:civi & 牧野裕二(高松市美術館) デザイン:福井裕子(高松市美術館)

〒760-0027 香川県高松市紺屋町10-4

Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

高松市美術館 <http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/647.html>

編集後記

■この秋、私にとって大切な思い出がひとつ増えました。それは、アーティストである藤本由紀夫氏のアトリエを訪問させて頂いた事です。とてもステキな方で感動しました。貴重な体験が出来て感謝してます! [佐々木真理子]

■神戸コロエ展研修旅行は長男(小1)と一緒に参加。午後はグループから離れてポートライナーに初乗車。初めて乗る新交通システムは、なんと運転手不在でびっくり!! 思い出深い一日でした。[末原香里]

■偶然にもTVでみた「コーネルの箱」の虜です。胸が苦しくなるその甘みさを、実物に対峙して味わってみたい。[高木由貴子]

■この秋も、アートでお腹がいっぱいになりそうな予感がします。芸術の秋、食欲の秋、到来! [富岡洋子]

■藤本さんの所では、片目にストロボの光を当てて、その光の残像がピンク色で「ECHO」の字に浮かぶ、そんな作品の体験も出来ました。私は小心で実体験してないのですが、白い壁に光の残像が美しく映えたそうです。[堀本真弓]

■「このままずっと続けたいのに…」夏の展示会が終わろうとする頃、こんな幼稚な願望がよく頭をよぎりました。いまでも眼をつぶれば、キーボードの持音や鉄板の上を球が転がる音が心の中でこだまします。[高松市美術館学芸員 牧野裕二]